

剣道の勝敗の本質に焦点化した体育授業の検討

眞野 雅弓 (香川大学)

1. 目的

本研究では、剣道授業における剣道の本質的価値を、勝敗をめぐる態度を育成することと捉え勝敗をめぐる態度の指導方法について検討する。

2. 研究方法

- 1) 対象者: 「剣道」の武道授業を受講した経験のあるK大学教育学部附属T中学校生徒
1年2年3年 315名(9クラス×35名)
- 2) 方法: 質問紙調査(問1調査対象者の属性, 問2剣道授業で学んだこと, 問3剣道授業に対する考え方)

3. 結果と考察

1) 対象者について

有効回答は315名中276名(1年生95名, 2年生89名, 3年生92名)であった。

また、各学年の授業担当者に確認したところ剣道授業の中で「試合」を実施した学年は1年生のみであることが分かった。

2) 「剣道に対する考え方」について

「剣道授業に対する考え方」の24項目に対して因子分析を行った。その結果、19項目による6因子が抽出された。各因子は十分な因子負荷量を示した項目の特徴より命名した。

3) 学年による比較

「剣道授業で学んだこと」では5つの質問項目において差が認められ全体的に高い値を示し、「剣道授業に対する考え方」では4つの質問項目において差が認められた。「分析の結果、1年生及び2年生が剣道授業で多くのことを学んでいると考えられ、因子1「剣道の勝敗に対する態度」において全体的に低い値を示していることからどの学年もガッツポーズなどの喜びを表す行為を控えるべきであることは理解していることが分かった。

4) 剣道授業の中での「試合」経験の有無による比較

「剣道授業で学んだこと」では5つの質問項目において差が認められ全体的に高い値を示し、「剣道授業に対する考え方」では4つの質

問項目において差が認められた。分析の結果、剣道授業による学習成果がある程度保障されているが特に「試合」を経験することで「技の習得」、「試合における勝敗への望ましい態度」、「運動能力の向上」、「剣道の試合での攻め方」、「剣道の試合での守り方」についての学習成果が高くなることが考えられる。また剣道授業の中で「試合」を経験することは勝敗への望ましい態度が身につくとともに技の習得、試合形式の練習に対する意欲付けになっていることが考えられる。

5) 授業以外(部活動、習い事など)での剣道経験の有無による比較

「剣道授業で学んだこと」には差が認められず、「剣道授業に対する考え方」は4つの質問項目において差が認められた。分析の結果、授業以外で剣道を経験することによって、勝敗に対する態度が身につくこと、試合の面白さに気付き、練習に対する意欲を高めると考えられる。

4. 結論と課題

剣道の試合を経験することによって勝敗に対する態度形成に効果的に影響を及ぼすことが分かった。さらに試合を経験することによって授業で試合での駆け引きを楽しみたい、技の習得への意欲が高まる傾向があることが分かった。本研究により、剣道授業における「試合」または「試合レベルの教材」の十分に取り入れた授業構成を検討する必要があること、それらの指導方法を検討し指導することができ、勝敗に対する態度の習得を評価できる指導者の育成が必要になると考えられる。

5. 主な参考文献

- 1) 文部科学省、「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 保健体育編」, 第2章保健体育科の目標及び内容 F 武道, p.143
- 2) 出村慎一・佐藤進・山次俊介・長澤吉則, 健康・スポーツ科学のためのSPSSによる統計解析入門, 株式会社 杏林書院, 2007年